

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 6 月 7 日現在

機関番号：12605

研究種目：基盤研究 (C)

研究期間：2010～2012

課題番号：22520522

研究課題名（和文） 相互行為を重視した話し言葉教育システムの構築

研究課題名（英文） A Collaborative Language Teaching Approach for Interactional Speaking Skills with Video Database

研究代表者

本郷 智子 (HONGO TOMOKO)

東京農工大学・国際センター・准教授

研究者番号：60401452

研究成果の概要（和文）：留学生を対象とした日本語教育において、会話を言語行動、非言語行動を含む総合的なコミュニケーション活動と捉えた教育活動実践記録のデータベース化を行った。それにより、各学習者が会話授業で何をどのように学んでいるかを教員間で共有化することが可能となり、教育改善に向けたシステムが構築された。

研究成果の概要（英文）：This research leads to a development of a collaborative teaching system for conversation class educators. A video database has been constructed by capturing students' learning process in acquiring interactional communication skills. The database can help language educators improve their teaching by making use of the classroom activities data. It allows educators to share and understand how each learner acquires his or her verbal and non-verbal conversation skills through actual events.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	500,000	150,000	650,000
2011年度	500,000	150,000	650,000
2012年度	600,000	180,000	780,000
年度			
年度			
総計	1,600,000	480,000	2,080,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・日本語教育

キーワード：教師論・教室研究・データベース・会話技能・共有化・学びのプロセス・相互行為・振り返り

1. 研究開始当初の背景

日本語教育における会話授業では、未だに文法教育の運用練習という捉え方が主流である。

(1) 会話分析や談話研究の成果を生かし、会話を言語行動・非言語行動を含めたコミュニケーション行動として指導する教育方法がまだ整備されていない。

(2) 会話授業で学習者自身が実際に何をどのように学んでいるのかという報告が見当たらない。

らない。

以上の点から、学習者自身が自分の相互行為を観察し分析する総合的なコミュニケーション活動としての会話授業を実践し、その事例報告を発展させる形で、データ分析を蓄積し、教授者間で共有できるシステム構築が求められている。

2. 研究の目的

本研究の目的は、「他者との相互行為的な

コミュニケーションにおける話し言葉能力」を養成する会話授業の実際を記述・分析し、その結果を教授者間で共有することにより、日々の授業実践を改善する教育システムを構築することにある。会話授業では、①会話タスクの「実践」における相互行為と、②「実践」の後にグループディスカッションの形式で行われる「振り返り」活動における相互行為が存在する。これらの相互行為を通して起こる学習者の学びのプロセスを、ビデオ録画資料および文字起こし資料を基に分析し、そこで得られた知見を会話授業の構成や内容にフィードバックすることを目指す。

3. 研究の方法

(1) 研究代表者らが所属する機関で実施している会話タスク「会話クイズ」の実践をビデオ録画し、会話技能別に分類する。



(2) データベース化に必要となる PC システム環境の構築を行う。

(3) ビデオ録画資料をデータベース化する。会話タスクの種類・会話目的・会話技能・学習者の属性・学習者レベル等の項目で検索できるようにする。

(4) 会話タスク後に行われる「振り返り」活動を IC レコーダにて録音し、文字起こし作業を行う。

(5) 「振り返り」活動の文字起こし資料を相互行為という面から質的に分析する。そのうえで、学習者のコミュニケーション技能の学びのプロセスを検討する。

(6) 構築された会話授業の実際を示すデータベース・分析結果をセンター内でアクセスできるようにし、相互評価する。その評価に基づいて、会話教育内容の改善を行う。

4. 研究成果

会話タスクの課題・技能等の整備が行われ、一連の授業活動のデータベースが構築された。

(1) 会話タスク

研究室場面を中心に相手の日本人とのやりとりを通して、課題を達成するタスクを選定した。下記はタスク例の一部である。

タスク例：PC 室の鍵を借りる・場所をきく・書き方をきく・研究室の番号を聞く・PC 使用

の許可を求める・欠席の許可を求める・友達のことを伝える・アドバイスを求める・行き方を聞く・忘れものを取りに行く・アドバイスを求める・推薦状の依頼をする

(2) 会話技能

各タスクの遂行において、必要となる言語/非言語行動、談話構成、共話要素、調整行動等の会話技能を抽出し、整理した。授業で取り上げられた技能例を下記に記す。

技能例：話題提示の仕方/会話のディスコース/切り出し・切り上げ/状況説明のスキル/モノの描写/確認のしかた/あいづち/聞き返しのストラテジー/聞き手の助けをを求めるストラテジー

(3) 振り返り活動

会話の実践データを基にした振り返り活動では、データベースを活用した教員間の分析を生かし、以下の点が扱われた。

① コミュニケーションの目的は達成しているか

② 協働的な会話が実現しているか

③ 相互行為の在り方（場・人間関係・共有情報等）

④ 情報の過不足

⑤ 談話の流れ

⑥ 言語行動・非言語行動

⑦ 予想外の展開に対応しているか

会話授業の「振り返り」活動における学習者の学びのプロセスを文字起こし資料および録画資料を基に記述し、質的分析を行った。その結果、学習者自身が参加している相互行為を、具体的な状況において分析することによって、言語機能や情報の取捨選択等、会話技能に関わる観点に各々が気づくことができている様子がうかがえた。また、「振り返り」活動における教師やクラスメートとのやりとりを通して、自らの相互行為を観察・分析し、1) お互いに経験を共有する、2) 他者の発話から分析のきっかけをつかむ、3) お互いのコミュニケーション行動を比較しあうことで理解を深める、といった学習プロセスも観察された。しかし、学習者に気づきが起こる会話技能に関する観点は主として「言語行動」についての点が多く、じつは相互行為を分析する上で重要な要素となる「非言語行動」、あるいは「言語行動と非言語行動の相応」にはなかなか意識が向かないことがわかった。

(4) 非言語行動の変容

会話教育で非言語行動をどのように扱うことができるかを探るために、一定期間の会話授業を通して非言語行動が大きく変容した学生を取り上げ、具体的な文脈でどのような行動が行われ、それがどのように変容して

いったかを質的に分析した。学期開始当初のやりとりを分析した結果からは、学習者が相手への働きかけ等の会話行動において、非言語行動と言語行動とを相応させ相互行為の手段として有効に使うことができていないこと、学習者と会話相手の非言語行動が同期する現象が現れず、二者の一体感のある相互行為が成立していないことがうかがえた。そして、会話タスクの「実践」を重ねることによって、学期後半には、言語行動と非言語行動が相応しともに相互行為の手段として有効に使われるようになってきていること、学習者と会話相手の非言語行動が同期し、より共話的でスムーズな相互行為が成立するようになってきていることが示された。

(5) マルチモーダル分析

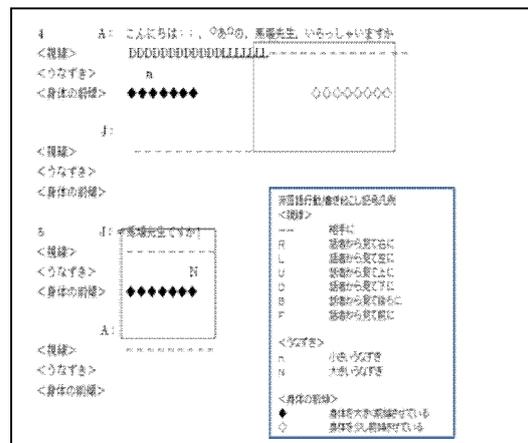
非言語行動、または言語行動と非言語行動の相応に対する学習者の気づきを促進する方法として、マルチモーダル分析を行った。対象は、上級日本語学習者が日本人との接触場面において行った一連の相互行為である。

学習者の日本人に対する働きかけ会話の録画資料を総合的なコミュニケーション行動の観点から分析することで、音声記録だけではわからない「言語行動と非言語行動の関連」をとらえ、それがどのように相互行為としての会話の構築に影響しているかを探った。

言語行動を示す文字起こし資料と共に、録画資料のスローモーションや画像キャプチャーを使用し、視線配布・うなずきや身体動作等、非言語行動を示す記述資料を作成した。視線配布については視線の方向性や参加者同士の視線を合わせるポイント、身体動作については、うなずきのタイミングや体の傾け方をそれぞれ時系列に記述した。また、抑揚や強弱、速さ、といった音声的情報は、音声分析ソフト（「杉スピーチアナライザー」）を使用し、各対象者の発話部分を分析した。

分析の結果、相互行為がスムーズに進行したと評価された資料では、学習者と日本人参加者の視線配布において、学習者の発話の切れ目のタイミングで合致する現象が見られた。また、その際、両者の体の傾きが互いに前のめりになっており、同調性が観察された。また、他の資料に比べて、連続発話やうなずきの引き込み現象が見られた。一方、会話がスムーズに進行しなかったと評価された資料では、日本人参加者は一貫して、視線を相手に向けていたが、学習者の発話時に学習者の視線のぼらつきが多く起こっていた。全ての資料において視線の合致は日本人の発話時に継続的に見られた。韻律的分析では、相互行為がスムーズに進行したと評価された資料において高低のはっきりした抑揚が示された。相互行為的な会話技能の評価は会

話参加者の印象を基に行うことが多かったが、本研究で試みたマルチモーダル分析を取り入れることで、より客観的な評価を提示できる可能性がうかがえた。



マルチモーダル分析例

(6) 第3者接触場面の会話分析：学習者間の雑談

研究室に所属する留学生にとって、研究活動の周辺で行われる雑談に参加し良好な人間関係を構築し維持することも重要な活動である。しかし、雑談は依頼等の課題遂行型の会話に比べ、教育現場で体系的に扱うことが難しく研究も未だ少ない。そこで、中級の授業活動の一部として雑談の実践・振り返り活動を行い、学習者の雑談への参加形態、学習者の会話への参加や会話の進行に関する意識と気づきについて記述、分析し、授業活動のあり方を検討することを試みた。その結果、雑談の実践において、各学習者の積極的な参加や調整行動、日本語運用力を補う行動等により、非常に円滑に会話が進行していることがわかった。また、本活動を母語話者との接触場面の準備段階ではなく、学習者の言語生活の一部である日本語使用場面に学習者が主体的に参加し、自らの参加のあり方を観察する活動として行う意義も見い出された。

(7) 今後の展望

本研究では、留学生を対象とした会話教育において、実際に学習者が何をどのように学んでいるのかを記録するデータベースを構築し、それを教師間で共有することによって教育の改善を目指した。相互行為を重視した会話教育では、留学生が研究室等で出会う日本人と良好な関係を構築することを目指した教育を行ってきた。今後、それを継続する教育者は、学生が日本社会に適応するという方向のみではなく、留学生と日本人が互いに相手を理解し合うことを出発点とする異文化理解の視点で会話教育を実践することが求められるであろう。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計8件)

- ① 山崎真弓・広田妙子・本郷智子 (2012) 「中級クラスにおける雑談会話の実践・振り返り活動の試み」『日本語教育方法研究会』Vol.20, No.1,110-111 査読無
- ② HONGO, Tomoko (2012) 「"Language and Society" Designing a Context-awareness Approach in Language Learning」『多摩留学生教育研究論集』第8号 東京農工大・電気通信大 17-23 査読有
- ③ 山崎真弓・本郷智子・広田妙子 (2012) 「日本語学習者の非言語行動の変容に関する事例研究—会話タスクの録画資料の分析から—」『多摩留学生教育研究論集』第8号 東京農工大・電気通信大 31-37 査読有
- ④ 本郷智子・山崎真弓・広田妙子 (2012) 「上級日本語学習者を対象とした相互行為のマルチモーダル分析」日本語教育国際研究大会予稿集 2巻 15 査読有
- ⑤ 広田妙子・本郷智子・山崎真弓 (2012) 「日本人学生に対する上級日本語学習者のインタビュー資料の分析—聞き手としての言語行動に注目して—」『日本語教育方法研究会会誌』Vol.19, No.1 70-71 査読無
- ⑥ 本郷智子・山崎真弓 (2011) 「相互行為的なコミュニケーション能力の養成—学習者変容の縦断的分析—」『異文化コミュニケーションのための日本語教育』1 高等教育出版社 383-384 査読有
- ⑦ 山崎真弓・広田妙子・本郷智子 (2010) 「学習者同士の振り返り活動を重視した会話授業」第35回日本語教育方法研究会会誌 62-63 査読無
- ⑧ 本郷智子・山崎真弓・広田妙子・越前谷明子 (2010) 「相互行為を重視した会話教育—振り返り活動における学びのプロセス—」『多摩留学生教育研究論集』第7号 東京農工大・電気通信大・東京学芸大 31-37 査読有

〔学会発表〕(計8件)

- ① 山崎真弓・広田妙子・本郷智子 「中級クラスにおける雑談会話の実践・振り返り活動の試み」第40回日本語教育方法研究会, 2013年3月10日, 東京大学(東京)
- ② 本郷智子 「理系留学生を対象とした日本語教育の継続的取り組み」JLEM20周年記念イベント, 2013年3月9日, 東京大学(東京)
- ③ 本郷智子・山崎真弓・広田妙子 「上級日本語学習者を対象とした相互行為のマルチモーダル分析」ICJLE2012日本語教育国際研究大会, 2012年8月19日, 名古屋大学(名古屋)
- ④ 広田妙子・本郷智子・山崎真弓 「日本人学生に対する上級日本語学習者のインタビュー資料の分析—聞き手としての言語行動に注目して—」第38回日本語教育方法研究会, 2012年3月10日, 国際基督教大学(東京)
- ⑤ 本郷智子 「日本語が使用されるコンテキストに対する観察眼の養成」The 3rd Annual N. E. A. R. Language Education Conference, 2011年5月28日, 国際大学(新潟)
- ⑥ 本郷智子・山崎真弓 「相互行為的なコミュニケーション能力の養成—学習者変容の縦断的分析—」ICJLE 世界日本語教育研究大会, 2011年8月19日, 天津外国語大学(中国)
- ⑦ 本郷智子 「会話教育について考える」2010年度東京大学日本語教育センター研修会, 2011年2月24日, 東京大学(東京)
- ⑧ 山崎真弓・広田妙子・本郷智子 「学習者同士の振り返り活動を重視した会話授業」第35回日本語教育方法研究会, 2010年9月11日, 金城学院大学(愛知)

〔図書〕(計1件)

本郷智子・山崎真弓・広田妙子 (2012) 平成22年度~24年度科学研究費助成事業基盤研究(c) 研究成果報告書「相互行為を重視した話し言葉教育システムの構築」1-73

6. 研究組織

(1) 研究代表者

本郷 智子 (HONGO TOMOKO)
東京農工大学・国際センター・准教授
研究者番号: 60401452

(2) 研究分担者

山崎 真弓 (YAMAZAKI MAYUMI)
東京農工大学・国際センター・非常勤講師
研究者番号: 80571190
広田 妙子 (HIROTA TAeko)
東京農工大学・国際センター・非常勤講師
研究者番号: 50571189